

クレオパトラの表象

——その死のパブリック・イメージ——

遠藤 直子

はじめに

クレオパトラ、その名から人はどんなイメージを喚起されるだろうか——古代エジプト最後の女王、絶世の美女にして英雄たちを手玉にする悪女、最後は“毒蛇に胸を噛ませて”悲劇的な死を遂げた——殊にそのドラマティックな死に様は、半ば定説（あるいは伝説）と化し¹、人口に膾炙している。

“毒蛇に胸を噛ませた”というクレオパトラの最期のパブリック・イメージに、17世紀のシェイクスピア²の戯曲『アントニーとクレオパトラ』³が大きく影響していることは疑いようがない。

<クレオパトラ>

(胸に当てた蛇に向かつて) さ、ちっちゃな殺し屋、お前の鋭い牙でこのもつれた命の結び目をひと思いに噛み切って。かわいい毒殺屋さん、怒りなさい、そしてさっさと片付けて。ああ、お前に口がきけるなら、偉大なシーザーに、馬鹿がまんまと出し抜かれたと言ってくれるだろう！

<シャーミアン>

ああ、明けの明星よ！

<クレオパトラ>

静かに、静かに！ この胸の私の赤ちゃんが見えない

の？ この子はね、お乳を吸って乳母を眠らせるのよ。

<シャーミアン>

ああ、裂けてしまえ、この胸も！

<クレオパトラ>

香油のようにかぐわしく、空気のように柔らかく、優しさは——ああ、アントニー！——そうね、お前もおいで。(もう一匹の蛇を腕に当てる) もう留まるまでもないだろう——(死ぬ)

(中略)

<衛兵1>

どういうことだ、シャーミアン？ こんなことがあっていいのか？

<シャーミアン>

いいのです、何代も続いてきた王家の姫君にふさわしいこと。ああ、衛兵！(死ぬ)⁴

この場面はまた、数多く描かれた絵画によって視覚的に補強されている。

シェイクスピアが『アントニーとクレオパトラ』ほか

1 実際、それが史実であるかのように説明している文献・資料は非常に多い。一般的になじみ深いものとして辞書・事典類を挙げると、『精選版 日本国語大辞典』(小学館, 2005～2006年)の「クレオパトラ」の項目にも、毒蛇に胸を噛ませて自殺したと明記されている。平松洋『名画で見るシェイクスピアの世界』2014年, 41頁の『アントニーとクレオパトラ』の解説でも同様のことが記されている。

2 William Shakespeare, 1564-1616.

3 *Antony and Cleopatra*, 1606-1607. 第5幕の第2場。イチジクの籠に隠して運びこまれた蛇2匹にクレオパトラが自ら胸と腕を噛ませ、駆けつけたオクテヴィアス・シーザーらが彼女の遺体の胸と腕の傷跡を確認している。ちなみに、シェイクスピアより少し後のドイツのダニエル・カスパー・フォン・ローエンシュタイン (Daniel Casper von Lohenstein, 1635-1683) の悲劇『クレオパトラ』*Cleopatra* (第1版1661年, 第2版1680年)では、クレオパトラが蛇に噛ませた部位は腕としている。橋本由紀子「ローエンシュタインの『クレオパトラ』における格言的表現 (Devisen, Sentenzen) について」『学習院大学ドイツ文学研究会論集』7, 1997年, 113～128頁。

4 松岡和子訳『アントニーとクレオパトラ』ちくま文庫, 2011年, 269～270頁より引用。同作の日本語訳は多く出版されているが、最も新しいものを使用した(戯曲特有の改行やスペースは無視した。下線は筆者によるものである)。

ローマ史劇を書くに際して、プルタルコス『アントニウス伝』(『英雄伝』の一部)⁵に依拠したことは周知の事実である⁶。クレオパトラの死に2人の侍女⁷が殉じ、女王より後に息絶えた方が今際にあるじを称える言葉を口にしたことも、プルタルコスが記したとおりである。ただし、プルタルコスにはクレオパトラが死に至る直接的な描写はなく(オクタウィアヌス=オクテヴィアス・シーザーも自ら彼女の遺体を確認しに赴いたのではなく使者を遣わしているのみ)、クレオパトラの腕にはっきりしない痕跡を見た者がいたらしいことや、毒蛇もしくは毒薬による自死が推測されるものの、結局真相は誰にもわからないと述べられているにすぎない⁸。したがって、“毒蛇に胸を噛ませた”⁹というのは完全な創作である。

物語のクライマックスに毒蛇に胸を噛ませて果て

る、その姿は『アントニーとクレオパトラ』という作品を、あるいはクレオパトラというヒロインの存在を、鮮やかに際立たせ、それゆえに定説(伝説)化したというのは、いかにもありそうな話である。以下では、クレオパトラの最期のパブリック・イメージ(歴史学研究者でさえ史実と誤認していることが間々ある)がいかにも形成されたのかということと、そうしたイメージの奥に隠れた実像を探ることを目的とする。同時に、前年度までは大学院生として附属図書館を利用していた経験があり、図書館員と利用者、双方の立場から当館の有用性を意識している者として、今回の調査が東北大学附属図書館の蔵書活用の一例となることを目指した。よって、特に断りのない限り、参考文献・論文の多くは当館所蔵のものを使用している。

1. “史実”におけるクレオパトラ

「毒蛇に体を噛ませたのクレオパトラの死。それはプルタークがつとに伝えている史実である。どうやら腕を噛ませてクレオパトラは命を絶ったようだ、そうプルタークは推測している。シェイクスピアはしかし、ここである重要な改変を敢えてした。周知のとおり、シェイクスピアのテキストでは毒蛇が噛む女王の体の部位は、腕もさることながら、胸である。腕はむしろ副次的な意味合いをしかもっていない」¹⁰。「自決の方法の詳細については過剰なほどに議論されてきた。その生涯の中ではるかに重要な出来事と釣り合いが取れな

いほど、長々と論じられることもあった。古代の史料は、正確に何が起こったのかは伝えていないので、この謎を詳細にわたって究明するのは、まず無理だろう。もし蛇に噛ませる手を使ったとなると、今度は、そのクサリヘビもしくはコブラの種類は正確には何だったのかと、人々は思いをめぐらせ、クレオパトラと侍女二人を殺すには何匹の蛇が必要かという疑問がわいてくる。もっとも有力な候補はエジプトコブラだが、六フィートの大きさになるものもあり、隠すのが難しかっただろう。二、三匹は必要だったとなればなおさらであ

5 Plutarchus *Antonius* 84-86. プルタルコス(プルターク)はローマ帝政期のギリシア人。『英雄伝(対比列伝)』ほか著作多数。ジャック・アミヨ Jacques Amyot が1559年に『英雄伝』を仏訳、さらにそれをトマス・ノース Sir Thomas North が1579年に英訳したものを、シェイクスピアは使用した。それ以外にシェイクスピアが参照した可能性のあるものに関しては、岡田洋一『『アントニーとクレオパトラ』: リアリティの問題』『英文学評論』34, 1975年, 2~3頁; 北村紗衣『イギリス・ルネサンスにおける「クレオパトラ文学」——シェイクスピアのクレオパトラとその姉妹たち』『超域文化科学紀要』14, 2009年, 70頁。なお、プルタルコス『英雄伝』のテキストは本学の河野文庫や児島文庫、晩翠文庫やさらには漱石文庫にまでも含まれている。それぞれの特蔵文庫内のプルタルコスの括りでの調査もしくは展示の可能性をここで示唆したい。

6 Muir, K., *Shakespeare's Sources* (2 vols.), London, 1957; Spevack, M., (ed.), *Antony and Cleopatra: A New Variorum Edition of Shakespeare*, New York, 1990.

7 プルタルコスの原典ではエイラス Εἰραγ とカルミオン Χάρμιον。シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』では Iras に Charmion であり、邦訳においては訳者によってそれぞれイラス、アイアラス/チャーミヤン、カーミアンと表記が一定していない。松岡訳ではアイラスとチャーミアンとなっている。エリザベス朝時代の英語の発音がどのようなものであったかという問題になるが、この件に関して松岡氏は独自の見解を述べている。松岡, 前掲書, 280頁。余談であるが、カルミオンという名は語尾が中性形ということで奴隷の身分を示しているということである。河野訳『プルターク英雄伝』11, 岩波書店, 1956年, 164頁。河野与一(または與一, 1896~1984年)は元・東北帝国大学法文学部教授, その旧蔵書が河野文庫である (<http://www.library.tohoku.ac.jp/collection/collection/comentary.html#kono>)。

8 村川健太郎編『プルタルコス英雄伝』(下), ちくま学芸文庫, 1996年(初出は『世界古典文学全集』23, 筑摩書房, 1966年)参照。

9 毒蛇に胸を噛ませる描写は多分にエロティックな意味合いを帯び、そこに聖母子像を暗示しようと解釈する研究者もいる。Muir, K., *Shakespeare: "Antony and Cleopatra"*, London, 1987, p. 115.

10 小川泰寛「自死のドラマトウルギー——クレオパトラの死をめぐって(2)」『The Northern Review』24, 1996年, 17~27頁(下線は筆者による)。

る。プルタルコスが、イチジクの入った籠に一匹の蛇が隠され王宮の室内に持ち込まれたという話を伝えている。ディオでは、花の入った籠になっている。どちらも異なる説を紹介しており、毒の種類もさまざまである——たとえば、いつもクレオパトラが着けていたヘアピンが使われたというのものもある。中が空洞になっており、致死量の毒が入っていたというのである。中身は、前もって集めておいた蛇毒だったかもしれない。ストラボンが「毒の入った軟膏だとしている」¹¹。

クレオパトラに関する文献史料はすべて、彼女の死後少なくとも1世紀経ってから書かれたものであり、それも帝政ローマ側の視点で物されている。プルタルコスの生年は紀元後45年頃、つまり紀元前30年のクレオパトラの死から80年近く、執筆可能年齢に達したころには100年近く経過していたことになる¹²。彼は、『英雄伝』の序文において自らの著作が「歴史 (ιστοριαί) ではなく伝記 (βίαι)」であり、伝記は偉人の徳に学び自己の性格を向上させるものであると述べている¹³。プルタルコスはもちろん、当時の史料を典拠としており(引用した歴史家は150人以上にのぼるといふ)、現代に至るまで多くの史料批判や研究がなされ、その記述の正確性はある程度明らかになっている。しかしその一方で、必ずしも事実を伝えているとは限らないという点に注

意を払っておくべきであろう。とはいえ、プルタルコスは「広く世に親しまれる作家であるとともに、広範な関心により著された大量の作品群は古典学上の貴重な(往々にして唯一の)情報源である。個別研究対象としての価値を疑う否定的評価もかつてはあったが、とりわけ1990年代以降急速に進む再評価の中でそれも塗り替えられつつある」¹⁴。

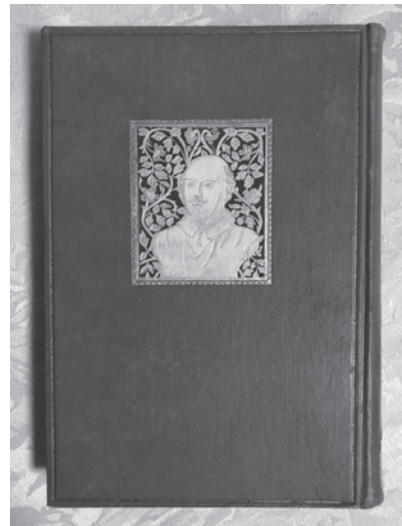
プトレマイオス朝エジプト最後の女王クレオパトラは、前69年もしくはその前年の生まれと考えられている。父親はプトレマイオス十二世とされているが、母親ほか詳しい係累はわかっていない。クレオパトラとは「名高い祖先をもつ者」という意味で、マケドニア系¹⁵ではめずらしくない名前であった¹⁶。クレオパトラ七世とも称されるが、これは現時点でこの王朝に確認される7人目のクレオパトラであるということからの通称である(歴史学上、クレオパトラといえばほぼ確実にこのプトレマイオス朝最後の女王を指すため、これ以降も単にクレオパトラとのみ記す)。なお、我々がクレオパトラ自身は「テア・フィロパトル(愛父女神)」を名乗り、公文書や碑文にもそのように記されている¹⁷。

クレオパトラが美貌であったか否か、あるいはその肌・髪・目の色に関しては議論が多いが、決定的な証拠の不在により推測の域を出ない¹⁸。そもそもマケドニ

-
- 11 A. ゴールズワーシー 著、阪本浩 訳『アントニウスとクレオパトラ』(下)、白水社、2016年、191頁(下線は筆者による)。プルタルコス以外でクレオパトラの最期に言及のある一次史料は、Dio Cassius 51.13. 4-14. 6; Velleius Paterculus 2. 87. 1; Strabon *Geographica* 17. 1. 10. 二次文献は Grant, M., *Cleopatra*, London, 1972, pp. 224-228; Pelling, C. B. R., (ed.), *Plutarch: Life of Antony*, Cambridge, 1988, pp. 316-322; Green, P., *Alexander to Actium: The Historical Evolution of the Hellenistic Age*, California, 1990, pp. 679-682; Rice, E. E., *Cleopatra*, London, 1999, pp. 86-91; Hölbl, G. (trans. Saavedra, T.), *A History of the Ptolemaic Empire*, London, 2001, pp. 248-249; Fletcher, J., *Cleopatra the Great: The Woman behind the Legend*, London, 2008, pp. 314-319. シェイクスピアとプルタルコスに関しては、Green, D. D., *Plutarch Revisited: A Study of Shakespeare's Last Roman Tragedies and Their Source*, Salzburg, 1979. 木村輝平氏は『アントニーとクレオパトラ』における人物描写に関して、プルタルコスを中心とした史資料との比較検討を行っているが、クレオパトラが死に臨む場面に関しては言及していない。木村輝平「シェイクスピア劇とローマ史の人物像——プルタルコスを中心に——(IV): 『アントニーとクレオパトラ』論(その一) アントニウスとクレオパトラの恋」『英文学評論』43, 1980年, 73~92頁; 同「シェイクスピア劇とローマ史の人物像——プルタルコスを中心に——(V): 『アントニーとクレオパトラ』論(その二) アントニウスとクレオパトラの恋(続)」『英文学評論』45, 1981年, 1~20頁。
- 12 プルタルコス自身については、森谷公俊『新訳 アレクサンドロス大王伝「プルタルコス英雄伝」より』河出書房新社、2017年、447~467頁; Beck, M., (ed.), *A Companion to Plutarch*, Chichester, 2014.
- 13 森谷、前掲書、22頁。
- 14 小池 登「趣旨と総括」(シンポジウム「プルタルコスと指導者像」)『西洋古典学研究』64, 2016年, 89頁。2015年に開催された日本西洋古典学会大会において、プルタルコス『英雄伝』に描かれる指導者像を考察するシンポジウムが開催され、哲学・歴史学・文学の立場からの報告・議論がなされた。瀬口昌久「プルタルコスの指導者像と哲人統治の思想」同91~103頁; 松原俊文「プルタルコス『英雄伝』のコンテクスト」同103~116頁; 中谷彩一郎『『対比列伝』におけるプルタルコスの「比較」と人物描写』同116~128頁。
- 15 プトレマイオス朝の諸王はエジプト人ではなくマケドニア系のギリシア人であり、クレオパトラの第一言語はギリシア語、受けた教育もギリシア文化によるものだった。A. ゴールズワーシー 著、阪本浩 訳『アントニウスとクレオパトラ』(上)、白水社、2016年、16頁。
- 16 かのアレクサンドロス大王の妹や、フィリップス二世の妻のひとりもクレオパトラという名である。ゴールドワーシー、前掲書(上)、56・82~83頁。
- 17 クレオパトラの称号に関しては、櫻井かおり「クレオパトラの『祖国』について」『青山学院大学文学部紀要』59, 2017年, 97~109頁。
- 18 2009年放送のNHKスペシャル「シリーズ・エジプト発掘 第3集『クレオパトラ 妹の墓が語る悲劇』」(<https://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.html?aid=20090802>)で、トルコのエフェソスで発見されたクレオパトラの妹アルシノエの頭蓋骨から顔顔がなされた結果、ヨーロッパ人とエジプト人との混血であったことが判明したとされた。ただしクレオパトラとアルシノエは異母姉妹であったといわれ、発掘された頭蓋骨もアルシノエ本人のもので確定しているわけではないために、依然真実は歴史の闇の向こうである。

ア系が均一民族ではなかったために、どのような可能性もありうるのである¹⁹。「クレオパトラはいつも都合のいいように描かれてきた。そのイメージは実に多彩だ。ふしだらな女、フェミニスト、信念に忠実に生きた女、腹黒い女。ときに金髪をなびかせ、ときに黒人にもなる。古代ローマの詩人ホラティウスは、男を破滅させる「魔物」と評した。中世イギリスの詩人チョーサーは愛を貫いた誠実さをたたえ、シェイクスピアは情熱的なヒロインに仕立て上げた。後にローマ帝国の初代皇帝となる政敵オクタウィアヌスは、彼女を淫婦と呼んだ。古代ローマの英雄カエサルとアントニウスを誘惑し、破滅に導いた妖婦—— 絵画や文字に描かれる支配的なクレオパトラ像は、まさにこのイメージだ。実際クレオパトラとは何者だったのか。その答えを知るのはむずかしい。紀元前30年に死んだ彼女の肉筆は残っていないし、当時のエジプトの首都アレクサンドリアの遺跡は海底に埋もれている」²⁰。

パブリック・イメージの鮮烈さと相反する史料の乏しさが、類型的なファム・ファタール像を長く定着せしめる要因となったといえるかもしれない。とはいえ、最近では征服者となったローマ帝国によるネガティブ・キャンペーンや後世の芸術作品による悪女的イメージとは異なる、女性であることのハンディキャップも含め逆境を乗り越えんとするクレオパトラの統治を明らかにする研究もみられ²¹、歪曲されてきたクレオパトラ像の修正が図られていることもまた事実である。



坪内逍遙訳『アントニーとクレオパトラ』早稲田大学出版部、1915年。東北大学附属図書館本館地下書庫所蔵(旧片平)。『アントニーとクレオパトラ』の日本語訳のうちでもっとも古くに受け入れられたものである。



坪内訳の口絵(カラー)。英語で“アルマ=タデマの絵より”と書かれているため、模写か。

2. 書かれ、描かれ、演じられたクレオパトラ—— 変転する虚像と実像

シェイクスピアの時代、すなわちルネサンス時代において、多くの西洋古典が(当時の)現代語に訳され、「ローマの政敵」であったクレオパトラの姿が知られるようになる²²。古典の作者たち、つまり実際のクレオパ

トラの記憶がまだ新しい世界の住人たちの目には、彼女は程度の差こそあれ批判的に映ってはいるものの、ファム・ファタールというよりもローマの敵という認識が強かったということである²³。シェイクスピアは、

19 ゴールズワージー、前掲書(上)、155～160頁。

20 L. トーマス「誤解された女王の真実」『Newsweek』43、2008年、65頁。

21 Tyldesley, J., *Cleopatra: Last Queen of Egypt*, New York, 2008: 櫻井かおり「クレオパトラ治世のハイブリッド性」『青山史学』35、2017年、29～44頁。

22 プルタルコス『英雄伝』はルネサンス期の英国においてもっとも人気の高い古典作品で、ノースの英訳によって、古典の知識や言語を知らない一般庶民にも読まれるようになった。楠明子『シェイクスピア劇の〈女〉たち——少年俳優とエリザベス朝の大衆文化』みすず書房、2012年、152頁(第5章『アントニーとクレオパトラ』Antony and Cleopatra——異文化衝突・戦争・女王)152～178頁)。

23 「カエサルとアントニウスが悲劇的な最期を迎えると、政敵たちはクレオパトラの伝説を「教訓」にすり替えた。女性を国の指導者に据えるのは不適切で危険だ、と」トーマス、前掲論文、65頁；北村、前掲論文、70頁。北村氏は、プルタルコスのクレオパトラ評が比較的公平かつ穏当でありエピソードも豊富であったがゆえにシェイクスピアにとって利用しやすかったと指摘している。

一次史料に表れるクレオパトラ像に、大幅な変更を加えた——より美しく、より強かに²⁴。

なお、近代においてクレオパトラを創作のテーマとして採り上げているのは、シェイクスピアに限ったことではなく、またシェイクスピアが最初でもない。中世後期より、クレオパトラは様々な作品において「政敵」よりも「(ローマの有力者たちの)恋人」として特徴づけられることになる。興味深いのは、ひとことでルネサンスといっても、イタリアと英国ではクレオパトラの扱いに差異が生じている点である。イタリア・ルネサンスの文学においては、クレオパトラは愛欲によって身を滅ぼした女として断罪されるパターンが多くみられる²⁵一方、英国の文人たちに彼女を批判する意図は薄く、ただ愛に殉じた美女として描き出している²⁶。クレオパトラを劇作の題材にしたものでシェイクスピアに先んじたものは、メアリー・シドニーの『アントニウス』²⁷、サミュエル・ダニエルの『クレオパトラ』²⁸などがあり、シェイクスピアはこれらの作品から影響を受けたといわれている²⁹。

こうした作品が好まれた背景には何があったのであろうか。シェイクスピアの時代の英国人には、導入された種々の書物(旅行記や小説)の内容から、男女の立場

が逆転した、場合によっては男女の身体的特徴まで入れ替わった、キリスト教的価値観からかけ離れた社会という誤解に満ちたエジプト観が広く浸透しており、シェイクスピアは『アントニーとクレオパトラ』の執筆に際して、そうした英国人の抱くイメージを巧みに利用しつつ主人公たちの人間関係を描き出そうとしたという³⁰。当時の英国においても劇中の古代ローマ世界においても不道徳とされた行ないをしているにもかかわらず、クレオパトラは複雑な魅力に満ちている。17世紀の英国人からみれば大昔の、異国の、非キリスト教徒であるところの、“無限の変化”³¹に富む女王の姿はさぞ鮮烈だったことだろう。「彼女は愛に殉じての自死によって、この上もない貞淑さを証明する。蛇に噛まれて死ぬ女の死に方、苦痛の如何こそは、自死の舞台でこの先煽情的に提示されよう。蛇についての詳しい話しは、クレオパトラにまつわって疑いもなく後世に伝えられた」³²。

ときに、クレオパトラを題材にした数々の絵画は、“毒蛇に胸を噛ませた”という彼女の劇的な死に、最初の矢を射たのがシェイクスピアではないことをも示唆している。16世紀前半にはすでに「クレオパトラの死」をテーマとした、それも自ら蛇に胸を噛ませる姿を描いたエッチングやエングレーヴィングがいくつも存在

24 北村, 前掲論文, 71頁。

25 ダンテ (Dante Alighieri, 1265-1321) 『神曲』*La Divina Commedia* (1304年～1308年頃成立)の地獄篇・第二圏、ペトラルカ (Francesco Petrarca, 1304-1374) 『順逆両境への対処法』*De Remedijs Utriusque Fortunae* (1366年頃成立)の第2巻19番、ボッカッチョ (Giovanni Boccaccio, 1313-1375) 『名婦列伝』*De Mulieribus Claris* (1361～1362年頃成立)の第88章などで、クレオパトラは忍耐強いキリスト教徒の女たちとは対照的に、悪徳の末に破滅する異教徒の暴君として描かれている。北村, 同論文, 72頁。

26 チョーサー (Geoffrey Chaucer, c1343-1400) 『善女物語』*The Legend of Good Women* (1385～1386年頃, 未完)以降、ジョン・ガワー (John Gower, c1330-1408) 『恋する男の告解』*Confessio Amantis* (1386年頃～1393年頃成立), ジョン・リドゲイト (John Lydgate, c1370-c1450) などがチョーサーの方向性を踏襲した。北村, 同論文, 73頁。

27 ペンブローク伯爵夫人 (The Countess of Pembroke) ことメアリー・シドニー (Mary Sidney, 1561-1621) 『アントニウス』*The Tragedy of Antonie / The Countess of Pembroke's Antonie* は、フランス・ルネサンス文学のロベール・ガルニエ (Robert Garnier, 1544-1590) 作『マルク・アントニ』*Marc Antoine* (1578年)を1592年に英訳したもの。

28 サミュエル・ダニエル (Samuel Daniel, 1562-1619) 『クレオパトラの悲劇』*The Tragedy of Cleopatra* (1594年)。メアリー・シドニーから直接依頼を受けて書かれたともいわれる。1607年に改訂された際には、反対にシェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』を参照したと考えられている。

29 先行作品群がシェイクスピアに及ぼした影響や、各作品との共通点に関する研究は、北村, 前掲論文; 佐藤達郎『サミュエル・ダニエルのクレオパトラ——エリザベス表象に関する一考察』『Shakespeare News』43-3, 2004年, 14～22頁; Chambers, E. K., *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems* (2 vols.), Oxford, 1930; Craig, H., *An Interpretation of Shakespeare*, New York, 1948; Ress, J., “An Elizabethan Eyewitness of Antony and Cleopatra?”, *Shakespeare Survey* 6, 1953; Schanzer, E., “‘Antony and Cleopatra’ and the Countess Pembroke’s ‘Antonius’”, *Notes and Queries* 201, 1956; Norman, A. M. Z., “Daniel’s *The Tragedie of Cleopatra* and *Antony and Cleopatra*”, *Shakespeare Quarterly* 9, 1958; Seronsy, C. C., “Shakespeare and Daniel: More Echoes”, *Notes and Queries* 205, 1960; Brower, R. A., *Hero and Saint: Shakespeare and the Graeco-Roman Heroic Tradition*, Oxford, 1971.

30 勝山貴之『『アントニーとクレオパトラ』とエジプト——近代初期英国におけるエジプト表象と劇作家の手法——』『主流』75, 2013年, 49～79頁。作中で描写されているローマ観については、服部厚子「『メタファー』としての「ローマ」——『アントニーとクレオパトラ』をめぐる——」『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』35, 1989年, 205～215頁; 同『『アントニーとクレオパトラ』におけるローマ的な言説について』『鈴鹿医療科学技術大学紀要』2, 1995年, 161～172頁。

31 infinite variety. 『アントニーとクレオパトラ』第2幕第2場・212行でクレオパトラはこう評されている。

32 小川, 前掲論文, 18頁。

していた³³。それに先行するモチーフは、プルタルコスもクレオパトラをそう評した女神ヴィーナスであり、あるいは聖書のエヴァであると考えられている。女神のような女王と蛇が、文字どおり“絵になる”題材であったことは想像に難くない。何を、あるいは誰をもって嚆矢とするのかは、画家たちのバックグラウンドや制作の動機づけ、時代の経過に伴う画材や構図の変化などを考察する必要があるだろう。以下は美術史に関して門外の者であるゆえの根拠に乏しい推測にすぎないかもしれないが、筆者が確認した「クレオパトラの死」³⁴を描いた画家31名のうち、その作品の成立年代がシェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』より後のものは22点であった。つまり、三分の一はシェイクスピアに先じたものであり、むしろシェイクスピアの方がそうした絵画から着想を得た可能性が高いといえる。シェイクスピアこそがクレオパトラの死のパブリック・イメージ形成の立役者であるかのような固定観念は、ひとえにシェイクスピアが現在に至るまでに得てきた評価に由るであろう³⁵。

さて、こうしてできあがったクレオパトラの死の様子は、舞台上でどのように演出されたのだろうか。シェイクスピアの同時代には、クレオパトラを演じたのは年若い少年俳優だったということである³⁶。日本人とし

ては、安直に歌舞伎の女形を思い浮かべてしまうところであるが、シェイクスピア劇で重要なのは、台詞であって台詞に伴う振りではないという³⁷。

福田恆存の訳した『アントニーとクレオパトラ』³⁸の巻末に、上演史と1956～1957年にロンドンで上演された同作の写真資料が掲載されている。最後の場面でマーガレット・ホワイトティング演じるクレオパトラは、豪華な衣装と冠を着け³⁹、舞台中央の玉座に端然と座して瞑目している（蛇がどう用いられたかは不明である）。その姿は、彼女の足許に仰向けに転がっている侍女たちとは対照的であり、オクテヴィアス・シーザーの「いさぎよい最期だ。こちらの意中を察し、さすがに王者にふさはしく、己れの行くべき道を探つた」という台詞が表わすとおり、女王らしい荘重さに満ちたものである。舞台の様子を記録した写真集は国立国会図書館デジタルコレクションにも掲載されている⁴⁰。

クレオパトラというキャラクターは、舞台のみならず映画やドラマ、果ては漫画やアニメのヒロインを演じてきたが、各分野における研究が進み真相が少しずつ明らかになるのとは反比例するように、（創作においてはその）美貌や妖艶さがクローズアップされる一方で性格づけは単純化される傾向があるようにも思う——プライドばかりが高く、時にはヒステリック、そのわりには政

33 高梨光正「METAMORPHOSEON」『国立西洋美術館紀要』6, 2002年, 7～20頁; 若名咲香「肖像画的クレオパトラ像の形成: ウォーターハウス《クレオパトラ》の解釈をめぐって」『上智大学文化交渉学研究』1, 2013年, 21～35頁; 同「『シェイクスピア・ヒロイン』展再考: その唯美主義的側面に関する試論」『上智大学文化交渉学研究』2, 2014年, 1～21頁; 保井亜弓「アウグスティン・ヒルシュフォーゲル作《クレオパトラの死》」『金沢美術工芸大学紀要』61, 2017年, 73～87頁。

34 クレオパトラの死の場面に関し、クレオパトラ、もしくはクレオパトラと誰かをテーマとしたものは含まない。余談であるが、中世風の衣装をまとった姿で描かれたクレオパトラも中には散見される。一例を挙げるならヨハン・リス Johann Liss (c1597-1631) によって1622～24年頃に描かれた「クレオパトラの死」がそうである。これもまたクレオパトラという題材に迫真性を与えるための演出であるという。現代人の感覚では奇異に感じることはあるが、考えてみれば明治期以降の日本で西洋の物語が翻訳されるにあたり、登場人物の名前を（舞台設定は西洋のまま）日本名にするということが頻繁に行われていた。例えば『フランダーズの犬』（1908年、日高善一訳）では主人公ネロが清、『モンテ・クリスト伯』（1901～1902年、黒岩涙香）ではエドモン・ダンテスが團友太郎、『シンデレラ』に至ってはシンデレラ＝おしんであり、舞台も日本とされている。これは、その時代・その地域の人間に受け入れやすさのための工夫であり、そうした工夫は往々にして時代考証を後回しにしたものとなるのである。受容しやすさを目的とした改変は、実は現代でも日常的に行なわれていることである。もともと外来語をカタカナ表記すること自体が（そのプロセスで失われるものがあるとしても）わかりやすさ・なじみやすさを追求した最たるもののひとつであろう（かのオーストリア皇后 Elisabeth はドイツ語の発音により忠実に表記するならば「エリーザベト」となるところがもっぱら「エリザベート」として認知されている、など）。ここでどうしても想起してしまうのは、古代ローマ帝国による“ローマ化（とかつて研究界で呼ばれていた施策）”である。ローマはその版図を広げるに伴い、被支配地にローマ流を持ちこんでいったが、それは決して一方的な押しつけではなく、それぞれの地に即した、時には現地流と習合したいわば相互作用であった。つまりは、受け入れやすさの追求は、非常に現代的である一方で、文明社会の伝統といえるのかもしれない。明治期以降、どのような外国文学が日本にもたらされ、その奥にはどんな歴史的事象があったかについては、鴻巣友季子『明治大正 翻訳ワンダーランド』新潮社、2005年を参照。西洋古代がいかに日本にもたらされたかに関しては、拙稿「漱石とパレオロガス——日本はいつローマ帝国と出会ったか? ——」『史叢』第99号、2018年, 60～72（左25～13）頁。

35 北村氏は、シェイクスピアがいかにして英国の“正典”となっていたのかをダイナミックに考察している。北村紗衣『シェイクスピア劇を楽しんだ女性たち——近世の観劇と読書』白水社、2018年。

36 楠, 前掲書, 153頁。

37 同書, 154頁。以下、少年俳優が円熟した年頃のクレオパトラを演じるにあたり、どのような芝居作りがなされたかが論じられている（～174頁）。

38 新潮社、1961年（シェイクスピア全集14）。

39 「メーキャップと衣装はあまりにもクレオパトラの通念からはづれていたらしい」と評されている。同書, 272頁。

40 谷内松之助編『アントニーとクレオパトラ写真帖: 史料参考』電気館内写真帖出版部、1914年 (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/966051>)。

治的に無策、といった具合に⁴¹。宮尾登美子『クレオパトラ』⁴²は旧来のクレオパトラ像を覆し新たな解釈を試みており、事実、膨大な参考資料を網羅し、クレオパトラを温かい存在感をもった女性として再構成している。しかし、等身大の女性像を意識するあまり、(特に物語の後半で)ごくありふれた姿に矮小化されてしまったきらいもある。ひとりの女性、ひとりの人間ではあっても、それ以上に女王であってこそクレオパトラではあるまいか(むろん、創作上のヒロインとしてならばの話であるが)。同作は大地真央主演で舞台化もされており、登場人物も物語も舞台向きに大胆にデフォルメされている

が、そのぶん見ごたえのあるものとなっていた。終盤、クレオパトラはやはり蛇を使った自死に至るが、囁ませた箇所がどこであったのか、残念なことに記憶にない。最新のクレオパトラ芸術として、Kバレエカンパニーの「クレオパトラ」(初演2017年)を挙げておこう。筆者は公式動画やレビューを視たにすぎないが、クレオパトラの最期に蛇は登場せず(とはいえ彼女自身が蛇の化身であることが暗喩されているということだが)舞台上の高段より奈落に身を躍らせるという幕切れとなっている。女王自らが行くべき道の探り方も、時代に合わせて変化し続けているということだろう。

3. 日本にはいつ、どう伝わったか

クレオパトラはいつ日本にやってきたのだろうか。国立国会図書館デジタルコレクションによれば、クレオパトラの名がタイトルに確認できる書物で日本最古のものは、1903(明治36)年の『クレオパトラ：泰西艶史』⁴³である。扉に誰の手になるものか、はだけた胸に蛇をあてがうクレオパトラと思しき女性の姿が描かれている。ローマの歴史とからめ、クレオパトラのあらゆるエピソードを収録した1冊である。次は3年後の伊藤銀月『世界女性史』である。内容は文字どおり女性史⁴⁴で、クレオパトラは「神の如き魔の如きクレオパトラ」と評されているものの、そこに描写されている姿には、妖婦・悪女というよりも女傑といった趣があり、シェイクスピアよりもプルタルコスの影響が強くうかがえる。ただ、プルタルコスの『英雄伝』およびシェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』の翻訳が確認でき

るのは1910年代に入ってから⁴⁵であるので、伊藤銀月が何を参照したのかは判然としない。

『アントニーとクレオパトラ』を日本で最初に全訳したのは坪内逍遙である⁴⁶。逍遙がその緒言において、この作品がプルタルコスに基づいていることや、先行作が存在したこと、当時のローマの政情にまで言及し、さらにこの戯曲が初演以来約150年間上演されなかったこと、そして未だに(日本では大正初期)大成功をおさめたという話を聞かないと述べているのは興味深いことである。逍遙版にはまた、口絵としてアルマ＝タデマ⁴⁷の「アントニーとクレオパトラの出会い」⁴⁸(の模写?)が入れられている。逍遙訳の1年前に発表された島村抱月の『クレオパトラ：シェイクスピア作』は、『アントニーとクレオパトラ』を多少簡略化したもので⁴⁹、こちらにはジョン・メイラー・コリアの絵⁵⁰が掲載されている。

41 クレオパトラを演じた女優としてまず浮かぶのは映画「クレオパトラ」(1963年)のエリザベス・テイラーだろう。ヴィヴィアン・リーは『アントニーとクレオパトラ』およびバーナード・ショーの『シーザーとクレオパトラ』の両方で、それぞれ趣の異なるクレオパトラを演じている。舞台でクレオパトラを演じた女優で有名なのはサラ・ベルナルドであろう。1999年のテレビ映画「クレオパトラ」(筋はほぼエリザベス・テイラー版と同じ)のレオノア・ヴァレラは、クレオパトラというよりは、エジプト人といわれて一般的にイメージされる容貌が特徴的であった。戦後日本における『アントニーとクレオパトラ』の主な上演記録は松岡、前掲訳書、289～291頁。

42 朝日新聞社、1996年(上下巻)。2002年に新潮社より文庫化されている。

43 佐藤天風 翻訳『クレオパトラ：泰西艶史』国光社、1903年 (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/782302>)。

44 伊藤銀月『世界女性史』隆文館、1906年 (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/798956>)。クレオパトラは大日靈貴尊、神功皇后、平政子、西太后、ジャン・ダーク(ジャンヌ・ダルク)、イサベラ(カスティールヤ女王イサベル一世)、エリザベス(一世)、マリヤテレサ(マリア・テレジア)、カザリン(エカチェリーナ二世)などと並んで採り上げられている。

45 「マーク・アントニー傳」が収録されている『プルターク英雄伝』第1巻は1915年に出版されている (<http://dl.ndl.go.jp/search/searchResult?featureCode=all&viewRestrictedList=0&ctocItemId=info%3Andljp%2Fpid%2F950212&searchWord=%E3%83%97%E3%83%AB%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%82%AF&facetOpenedNodeIds=4%3A11&filters=4%3A11>)。翌年には高橋五郎が翻訳した『プルターク英雄伝』が刊行されている。河野吾一による古代ギリシア語からの原典訳が出たのは約50年後の1952年であった。

46 坪内逍遙『アントニーとクレオパトラ』早稲田大学出版部、1915年。

47 ローレンス・アルマ＝タデマ(Lawrence Alma-Tadema, 1936-1912)、英国の画家。西洋古代をテーマにした作品が多い。

48 1883年。

49 島村抱月『クレオパトラ：シェイクスピア作』新潮社、1914年 (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/985928>)。

50 ジョン・メイラー・コリア(John Maler Collier, 1850-1934)は英国の画家。「クレオパトラの死」(1890年)には、寝台に姿勢よく横たわるクレオパトラと、枕元に立つ侍女が描かれている。

むすびにかえて：真実のクレオパトラ，あるいはクレオパトラの真実はいずこに

近年，クレオパトラの蛇毒による死に疑問を呈する，医学的あるいは精神分析的見地からの考察がしばしば見受けられるようになった⁵¹。作中でクレオパトラが用いた蛇（アスピック）＝エジプトコブラを検証し，即効性に乏しく致死率も低く，苦痛は長引くもので（クレオパトラの他には蛇で自殺したという有名人がいないことから），自殺には不向きであり，毒物を内服するなど確実に死に至る方法をとったうえで，古来よりのエジプト王朝のシンボルである蛇によって自らの最期を演出したというのが真相ではないかという医学者の推測⁵²は，最後の最後に根拠よりも想像力の方が勝っている点が実に面白い。

貨幣やレリーフに描かれたクレオパトラの姿から，彼女が甲状腺腫に罹患していたという大胆な説もある⁵³。死亡時のクレオパトラの肌の美しさの描写から二酸化

炭素中毒の可能性を読み取ってしまうのも医師ならではのであろう。そこに貨幣学や図像学，文章表現上の作法といった観点からの考察も加われば，さらに斬新な新説に辿りつけることだろう。

クレオパトラがどのように葬られたのかは，長らく謎とされてきた。プルタルコスおよびシェイクスピアが描写した女王の最期の場所は王家の霊廟ということになっているが，彼女が実際にどこに埋葬されたのか，ミイラ化はされたのか否か，一切わかっていない。現在，刑事弁護士という異色のキャリアをもつキャサリン・マルティネスが，エジプト考古学の権威ザヒ・ハワスと共にクレオパトラの墓を求めて発掘調査を続けている⁵⁴。はたして，クレオパトラは蛇にどこを噛ませたのか，どんな美女であったのか，その謎のヴェールが取り払われる日はそう遠くはないのかもしれない。

謝辞

今回の調査にあたり，相互利用係・参考調査係の皆さまには，ずいぶんお手数をおかけしたにもかかわらず，毎回迅速かつ真摯にご対応くださったことに心より感謝申し上げます。大量に複写依頼を出したものの，筆者の検索不備のせいで結局ほとんどの論文が二号館で所蔵していることが判明したという顛末もあった。

恥じ入ると同時に，東北大学附属図書館に蓄えられた知の厚み——蔵書数はかの古代アレクサンドリア大図書館⁵⁵のそれのおよそ5.8倍である——に改めて感じ入った次第である。

（えんどう なおこ，附属図書館情報サービス課）

51 稲富健一郎「『アントニーとクレオパトラ』に於ける自殺：土なるこの世から火と空気の永遠へ」『香川県立保健医療大学紀要』4，2007年，15～23頁は，自死を精神分析的見地から分析している。

52 早川 智「青い血のカルテ (33) クレオパトラとアスピック」『産科と婦人科』73-9，2006年，1182～1185頁（ほぼ同じ内容がAERAdot. で閲覧可能 <https://dot.asahi.com/dot/2017100300067.html?page=1> 2017年10月5日掲載）。早川氏は，シカゴ大学精神科が同時代史料を分析し，プライドの高さと自己愛こそがクレオパトラの自殺の原因とした説をも紹介している。

53 山本修三「死因究明 クレオパトラの死」『日本病院会雑誌』55-8，2008年，94 (902) 頁。

54 C. ブラウン「クレオパトラを探して」『ナショナル・ジオグラフィック』2011年7月号，32～55頁。

55 前47年，ユリウス・カエサル侵攻時に一度焼失したといわれる。その当時クレオパトラは20代前半であった。